

「ギー」——メルヴィルの民族誌学

石 井 光 子

“The ‘Gees’”¹⁾ は、メルヴィルが随分シニカルな気分で書き上げた小品であろう。24段落のごく短いスケッチながら、黒人の血を引くポルトガル籍の船員の姿を描くと見せて、当時のアメリカ合衆国の諸相をとらえてあげつらうに、これほど底意地の悪いふざけ方をして見せた作品は珍しいのではあるまいか。

「ギー」は、1854年の夏に脱稿、同年9月に、*Harper's New Monthly Magazine* の編集室に“Jimmy Rose”と共に送付され、1年半後の1856年3月1日付、第12号の507～509ページに掲載された²⁾。もちろん、投稿して顧みられなかったわけではない。メルヴィルは、1853年初夏に、雑誌社側から寄稿を「説得されて」³⁾、1856年までの間に、「ギー」を最終として、全7作の短篇や小品を提供している⁴⁾。

しかし、彼はもはや脱稿を急かされる人気作家ではなく、間違いなく誌面を賑わせられる予備の作品を書かせておく中堅どころの職業作家と見なされていたのであろう。35歳になったばかりのメルヴィルは、原稿依頼を受け、通常の倍の稿料を受け取りはするが、天賦の才を云々される作家でもなく、技術職としての評価を受ける物書きであった。と言うのも、「ギー」は無記名で公表されており、19世紀中葉のアメリカ合衆国の文壇における、創造的国民作家待望熱は“cult of author”とも呼ぶべき現象を示しており⁵⁾、1年半もの間、原稿を御蔵入りにされ、無記名で掲載される作品の著者が創造的個性を評価されていたとは考え難いのである。ハーパーズは、ニュー・ヨークを中心に、最盛期には10万の予約購読者を抱える高級文芸誌ではあったが、もともとは、“eclectic”，つまり、ゴッタ煮風の情報誌として創刊されており、豪華なイラストや英米の小説・読物に混じって、読者の投稿や手紙をしばしば取りあげる雑誌であった⁶⁾。このような雑誌に、3ページ弱の文章が著者名の無い状態で、それも、“the ‘Gees’” などと言う、一般読者にとっては、名詞の省略形らしいが発音すら判然としない新奇な単語を表題として載っていたのであるから、雑学的興味をそる異国風物や、珍奇な物品の紹介文として読者の目を引いたはずである。

好奇心に魅かれて読み始めれば、元船乗りと覚しき書き手が、友人相手の昔語りに、ギーが登場する度に聴き手が不思議がって目を丸くし、再三説明をするはめになり、話の腰を折られて閉口していたところ、友人が勧めてくれるので文章にして発表することにした、と言う書き出しである。これに、観光用ガイドブックのような説明文が曖昧な比喻とともに続き、学者気取りの言いまわし

が口語体の語り口にかえて滑稽味を添え、受けを狙う素人の文章のようである。そして、現場の声の代表であるかのように、ギーの選別・雇用の専門家である Hosea Kean 船長の言動が紹介される時点では露悪的な冗談が度を越した態を示し、最終段落において、この文章そのものを、“general sketchy view” と呼び、文責を免がれ、詳細は太平洋上のキーン船長に御照会下さい、という無責任な紹介文として締めくくっており、職業作家の手になるフィクションというより、酔いの回った元船員の法螺話・筆すさびという形をとっている。

そのせいか、「ギー」は発表当時も評論の対象となることもなく、また、メルヴィル再評価以後も、作家自身の人種差別意識の有無を特定する材料として使われる程度であった⁷⁾。例えば、S. Kaplan は、「ギー」を文面どおりに読み、“deplores the piece as a ‘tasteless’ slur on the Cape Verdeans,”⁸⁾ そして、メルヴィルの人種偏見が露呈されたものとしている。あるいは、R. B. Bickley のように、メルヴィルが終に “a persona that is ultimately distinct from himself as author” を創り出したと弁解し、“the fact that Melville would so carefully employ rhetorical irony in even a minor sketch suggests the degree of his commitment to irony in his magazine writings”⁹⁾ と論じて、このペルソナ・一人称話者の用いる “comic metaphor, exaggeration, understatement . . . satirical devices, . . . animalistic metaphors and similes . . . comic indirection”¹⁰⁾ に、メルヴィルの修辭的技巧の成熟を見出し、この “brutal” な話者や、文章力の冴えが何のために用いられたかに全く触れないまま、“Melville’s rhetoric in ‘The ‘Gees’ treats the common reader to an entertaining descriptive surface, which the more discriminating reader discovers ‘should be received with caution’”¹¹⁾ という駄洒落に逃げてしまっている。

あるいは、Dillingham のように、どうしてもメルヴィルを人種差別主義者と呼べず、為にする議論を展開して、メルヴィルの中の選民意識と男性優位主義を結論としてしまったような例もある。即ち、ディリングガムは、この小品で、ギーを侮辱・軽蔑するという形を借りて、メルヴィル自身が一般大衆に対して抱いている侮蔑・嫌悪感を露わにして見せている¹²⁾、という解釈を施している。そして、この傲慢なメルヴィル像を補強するために、“Man!” と呼ばれた途端に機敏に働き出すというギーの描写を引用し、ギーには “the strength and dignity that Melville associated with true manhood” が皆無であり、その姿が他のメルヴィルの作品における平均的男性像の “Emasculation and the futile desire for manhood” と合致すると論じ、妻に気圧されたままの「林檎の木の食卓」の話者を例に挙げ¹³⁾、あたかも妻を支配する類の“男らしさ”にメルヴィルが拘泥しているかのような論を立てている。

ビクリーが作品論を避け、文章力のみを賞賛したり、ディリングガムが精神的貴族を自認する男性神話に捕われたメルヴィル像を呈示してしまうような結論に至ったのも、唯々、両名が、メルヴィルの採用した人種差別的な語り口に戸惑ったためである。各々、1969年、1977年に上記の解釈を出版しているが、公民権運動を経験しているアメリカ合衆国において、メルヴィルに人種偏見があったとは口の端にも登せられない問題だったのであろう。両名ともに、あからさまな人種差別的言説

に目を奪われて、なんとかメルヴィルをアメリカの良心を具現する大作家のままに保っておこうとして、作品内に撒き散らしてある逆方向を指示する鍵を見過ごしてしまっている。

ことはどさように、一見人種偏見に満ちた文章であるが、初めて「ギー」を論ずるに細かく引用を対比させ1章を当てた C.Karcher に依れば、この作品は、当時、黒人奴隷制度擁護を目的として喧伝された人種学の“論文”のパロディーであり、メルヴィルは、この似非科学を揶揄しているのである¹⁴⁾。「ギー」の書かれた1854年、ハーパーズの対抗誌とも言うべき *Putnam's Monthly Magazine* の7月号に、メルヴィルの『イズラエル・ポター』の第1部が掲載されているが、この同じ号に、J. C. Nott と G. R. Gliddon 共著になる *Types of Mankind* の詳しい書評が載っており、メルヴィルが目にした事はもちろん¹⁵⁾、メルヴィルは、かなりの読者が、この時流に乗った人種学の論文に目を通しており、そのパロディーを受け入れる土壌が準備されていると想定していたであろう。

もちろん、ナイーヴな読者なら、「ギー」の語り口に乘せられて、文面どおりに元船乗りの投稿と取ったであろうが、Reynolds に依れば、“the new urban humor of the 1840s and 1850s”¹⁶⁾とも呼ぶべきものが成立しており、あらゆる真面目くさったものを洒落のめす読物が雑誌・新聞の類で大量に供給されていたのである。当然ながら、この当世都会派滑稽好みのような風潮は、俗化した清教徒の伝統を標的とし、“burlesque sermon”を典型として、“showmanlike preachers, immoral reformers, reverend rakes”¹⁷⁾を筆頭とする“quack . . .”を茶化すものであり、科学が宗教に代わって権威をもち始めた時期であるから、似非科学者もこの系譜に新たに加えられるものであろう。

更に、メルヴィルは、“The Authentic Anecdotes of ‘Old Zack’”なる、都会派ユーモアに属する小品を無記名で、1847年の7月から9月にかけて、*Yankee Doodle* に7回連載しており、特派員報告という形を取って、同時期に取材にやって来た、バーナム博物館の主、P. T. Barnum の俗悪な記念品収集癖をからかうという趣向で、メキシコ戦争の英雄にして、後、第12代大統領となるザッカリー・テイラーを変わり者の好々爺として描き出し、最終の第9話において、老ザックに好みの短上着を補充してあげたいと思われるなら、ニュー・ヨークのキャサリン通りとチェリー通りの角のブルックス商会で、背中と腕のたっぷりした最も分厚い茶色のを1箱注文し、メキシコ内合衆国駐屯地宛お送り下さい¹⁸⁾、というふざけた結末で締めくくっている。「ギー」の最後で、太平洋上のキーン船長に御照会下さい、と締めくくったのと全く同じ結末のつけ方であり、「ギー」が、メルヴィルなりの都会風滑稽読物の定型にのっとった小品であったことは確かであろう。メルヴィルは、文化的虚空の中で、出し抜けに、似非科学論文のパロディーを行なったのではなく、都市型娯楽読物の定型にのっとって、訳知りでありながら片目をつぶって、似非専門家の言説を一応伝えてみせる元船乗り、それも、聴き手の反応を盗み見ては勘案する一人称話者を創り出して人種差別風な冗談を展開させているのである。メルヴィルは文面を真に受けて、我意を得たりと喜ぶ読者や、人種差別を慨嘆する読者ではなく、パロディーを楽しみ、あわよくば鋭い批判を感得する読者を期待していたものであろう。

その上、メルヴィルは、まず第一段落において、“Such allusions [to ‘Gees’] have been quite

natural and easy. For instance, I have said *The two 'Gees*, just as another would say *The two Dutchmen, or The two Indians*" (p. 346) という文章をすべりこませている。元船員の話者にとって自然な事が、聴き手にとっていかに新奇かという、認識の落差を強調する修辭的目的を果たすとともに、人種・国籍に無頓着な話者の態度が言及されているのである。Karcher も指摘する点ではあるが、"Dutchmen" は、オランダ人を示すとともに、また、合衆国では "Deutsch" のなまった形でドイツ人をも示す語であり、"Indians" も、インド亜大陸のアーリア系民族か、アメリカ大陸のモンゴル系先住民族か判然とせず、民族・人種区分を無効にする語をあえて選び出している。また、カーチャーは、"two" を付すことによって、単一のサンプルのみをステロタイプ構成に用いる人種学の不自然さを揶揄しているとも指摘している¹⁹⁾。自身母方からオランダ系の血を引くメルヴィルにしてみれば、オランダとドイツが混同される合衆国の民族区分など信用するに足るものではなかったろうし、東西インドという呼称でアジアと西半球を把えたような古い地誌をひきずる合衆国が、人種区分をとにかく言えるものではなかったはずである。"two" は、実は、"two kinds of" の省略形として使われているものでもあろう。

また、作品の最後に近い第23段落では、アメリカ暮らしに慣れたギーは、"naturalized citizens badly sunburnt" に、あるいは、弁髪を巻き込んで帽子をかぶれば、ブロード・ウェイに行く中国人も、"an eccentric Georgia planter" (p. 351) に見える、とあり、それも、カーチャーに依れば、"mistaken" ではなく、"taken" と表現されているのであるから、人種学者や骨相学者が差別の論拠とする外観上の人種的特徴そのものが、合衆国では無意味であり、ここに、"Melville's egalitarian message"²⁰⁾ が表わされているわけである。つまり、カーチャーは、"Melville envisions a multiracial society where the symbolic concourse of Broadway offers room enough for all comers to promenade on an equal footing, and opportunities enough for all to fulfill the American dream"²¹⁾ と結論づけ、人種平等主義者メルヴィルが、人種学者の迷妄をからかいながら、似非科学に振りまわされない一般のアメリカ人の良識と、アメリカ合衆国の神話を称賛し、寿いでいるものと解釈するのである。故に、ギー選別の専門家なるキーン船長は、太平洋上で、"at sea",²²⁾ つまり、途方に暮れるしかない、と言うメルヴィルの最終的な謎かけが仕組める場所に放擲されたままに作品が終わったこととなっている。

確かにメルヴィルは、第23段落で、"The above account may, perhaps, among the ethnologists, raise some curiosity to see a 'Gee'" (p. 351) と、一介の船乗りですら親しく知っている民族集団を見た事がない民族集団の専門家、つまり、サンプル数がいかに少ない分類学者を皮肉っている。また、学者らしい "academic", "intellectual", "scholarly" 等という形容詞ではなく "some" という語を冠して用いられる "curiosity" を持つ、ともすると、単なる野次馬根性かも知れない好奇心の持ち主である人種学者像を呈示して、これまで、その業績をさんざん洒落のめしてきたこの似非科学者の名称を一度だけ具体的に挙げて作品理解の鍵としている。

しかしながら、人種学や骨相学の卑俗さを揶揄することだけが、この作品の意味であろうか。また、人種差別の正当化を狙う似非理論のパロディーが、なぜ、ビクリーやディリンガムがうろたえ

るほど差別的に聞こえるのであろうか。また、人種学理論に触れない現代人にとっては娯楽読物としてすら、意味をもたない作品なのであろうか。

作品の第2段落から話者はギーの紹介を始めている。素人が権威づけを求めているかのように、言語学用語を用いての皮切りである。“The word ‘Gee (g hard) is an abbreviation, by seamen, of *Portuguese*, the corrupt form of *Portuguese*.” (p. 346) むろん、人種学者の文体のパロディーを兼ねていようであろう。しかし、この文章が伝える内容は、この珍奇な1音節語が転訛した形容詞を略した海洋専門語なのということではなく、3音節語すら満足な形で使用できず、くずした上に切り捨てねばならない無教育な船員風情の俗語であり、ハーバーズの読者のような都市部中産階級の間には、好奇心の対象となる別世界の話でしかないということである。水夫のスラングが唯一の名称であるらしい南欧出身の船員というだけでも十分に異国風である上に、そのギーは、アフリカ北西の大西洋上にあるヴェルデ岬諸島で、3世紀も逆のぼる頃に、ポルトガルの流刑囚と原地の黒人が混血して出来上がった島民を指すと言う。ますます縁の無い世界の話である。そこへ、“Of all men seamen have strong prejudices, particularly in the matter of race” (p. 347) と第3段落が始まり、水夫の人種偏見を枕にして、下層白人の偏狭さを論じ、例として“some crusty old sea-dog”が“Ge-e-e-e!” (p. 347) と叫んで、同輩のギーを侮辱する姿を挙げ、老水夫の根深い差別意識を描いている。労働力不足の合衆国では、船に関する知識の無い農家出身の少年であっても30歳前には航海士から船長へと階層上昇するか、農地購入の資金を貯わえ陸へ戻るものであり²³⁾、老水夫とは酒と女に身をもちくずした社会的敗残者であり、道德改善運動や禁酒運動の盛んな東部では明らかに疑わしい存在であった。外国育ちの新米水夫を“shipmate”とする古参平水夫とは、無能な上に道徳的にも信用できない負け犬であり、アメリカの夢の裏側に属する人物像であった。つまり、水夫、アフリカの流刑地の混血部族、アメリカの夢の裏切者等を並べて、中産階級に属する読者が、人種や社会階層に関して差別意識やステロタイプ的な見方を根深く持っていればいる程、別世界の話として、ともすれば悪党物語やスラム探索物語に近い話として読めるよう工夫がこらされている。

メルヴィルがこれ程まで、読者が距離を感じるような設定で、「ギー」を己が身に引きつけて読むことのないよう配慮している理由はどこにあるのか。この小品は、ギーについての文章ながら、ギー自身の意見は、“In his best estate the ‘Gee is rather small (he admits it),” (p. 347) という第5段落の1行目だけで、括弧にくくってまでこの文章の中でギーが納得して認める彼自身の描写は、小柄だと言う点だけであることを示唆している。これ以外には、“Man!” (p. 350) と呼ばれると躍り上って、いかに苛酷な労働でも引き受けるという、人間扱いを望むギーの反応が描かれるのみであって、ギーを語るとしながら、ギーからの資料は皆無に近い。むしろ、アメリカ人がギーをどう扱っているか、どう扱っているかが描かれているのである。即ち、この作品は、ギーに関する“ethnography”の顔をしながら、実は、当時のアメリカ文化に関する、特にアメリカ人が外国人や有色人種に対して取る態度に関する“ethnography”なのである。

史実に基づけば、フェゴ島は無人数島で、ポルトガルが荘園経営のためにアフリカ人を奴隷として

導入して混血の進んだ島であり、作品にあるような原住民もおらず、耕作不能な土地でもない²⁴⁾。かと言って、ギーにあたる船員が存在しなかったわけではない。領土拡大とゴールド・ラッシュで若年男子労働力を失なった合衆国北東部の船は、“hungry and docile Portygees”をアゾレスやヴェルデ岬諸島で乗り組ませ、そのため、合衆国の港湾都市へのかなりの移住が起こっている²⁵⁾。史実に反してメルヴィルが、ギーを肌の黒い原住民の末裔としたのは、カーチャーの指摘するように、南北アメリカにおける原住民とアフリカ人の歴史を身を持って想起させる民族集団を登場させるためである²⁶⁾。更に、混血が始まって以来、“all the likelier sort were drafted off as food for powder”なので、ギーの先祖は“melancholy remainder” (p. 346) だという描写は、当時流布していた、“All the good Indians are dead Indians,”²⁷⁾ つまり、勇敢なインディアンは白人との抗争で死滅し²⁸⁾、生き残りは腰抜けばかりだと言う、あるいは、もっと直截に、インディアンを殲滅しようという、インディアンを火薬の餌食としか考えない白いアメリカの態度を踏まえている事は確かである。

また、乗り組んだばかりのギーは、最初の闇夜に海へ落ちてしまうので、新米のギーだけを満載せよという“owner”の指示がある場合、船長は2倍の人数を乗り組ませるとする第12段落は、飛び降り自殺の多かった中間航路と、半数の死亡を想定する“tight packer”と呼ばれた奴隷運搬船の船主と、奴隷労働力に固執する荘園所有者・奴隷所有者が背後に存在する事を示唆しようとするものであろう。また、馬市そのもののフェゴ島での水夫選抜の情景は、奴隷市を彷彿とさせるものであり、あるいは、集落に夜襲をかけると良質なギーが選べると主張するキーン般長は、奴隷狩人を反映している。賃金を求めず、“ship biscuits”と“cuffs and buffets” (p. 348) のみを与えられ、逃げようもない船内で労働するギーは、奴隷以外の何物でもない。

しかし、メルヴィルは、既に充分批判されていた南部の奴隷制度の非人間性を再確認するためだけに、このパロディを展開させていたのではなく、北東部の捕鯨業者や海運業者が、安価で従順な労働力を求めて導入した新たな奴隷制度、“green”な外国人労働者の初さと貧しさに付け込む、新移民による自由労働とは名ばかりの、アメリカの夢など悪夢に変えてしまう雇用形態の現状分析を行なっているのである。ギーはおとなしく安上がりでアメリカ人水夫よりも良質と主張する船長もあり、“such captains complaining, and justly, that American sailors, if not decently treated, are apt to give serious trouble” (p. 348) という状況は、萌芽的な労働運動が目立ち始めた合衆国北東部の工業地帯の現状なのである。ここで“justly”と言う語が加えられているのも、労務管理者たる船長、あるいは、資本家であるはずのハーバーズの読者層から見れば正当な主張である。また、象皮病のギーを乗り組ませたばかりに、航海が終わるまで、港で捨てるわけにもゆかず、3年間無駄に養なわねばならなかったという第18段落の警告に模した失敗談は、例えば、G. Fitzhugh が *A Sociology for the South; or The Failure of Free Society* ²⁹⁾ 等で攻撃した疾病・怪我・老年に際して労働者を路頭に迷わせる苛酷さ、あるいは切り捨てることの出来る自由労働制度の効率の良さに注意を喚起しているのである。

第7段落では、黒人とギーとが並列される。“Like the negro, the 'Gee has a peculiar savor,

but a different one—a sort of wild, marine, gamy savor, as in the sea-bird called haglet. Like venison, his flesh is firm but lean” (pp. 347-8) 両者の野性的な嗜好を比較するかのよう
に語り出しながら、転じて、ギーそのものの肉質を云々している。黒人奴隷は、アフリカの食人
の風習からキリスト教徒によって救い出され、改宗という恩寵に与かれたものと喧伝されてい
たが、彼らを取り込んだものは奴隷制度であった。そして、形は異なるが、アメリカ合衆国の提供す
る新しい食人制度は、奴隷制度の持つ保険的要素を無くして、ギーを組み込んだのである。

ポルトガルは、イスラム支配を脱して大航海時代の先鋒となり、伝説上のプレスター・ジョンの
キリスト教国を求めつつ、交易と植民地経営に乗り出し、一旦併合されたスペインからも1640年に
独立し、西半球の歴史を決定した勢力であった。ちょうど、清教徒等の宗教的情熱に始まる入植か
ら独立、内陸部を開拓しながら交易に動しむ合衆国に似ていなくもない。また、植民地であったヴ
ェルデ岬諸島は、黒人奴隷制度を受け入れ、メルヴィルに依れば、流刑地としての機能も果たし、
ちょうど、植民地時代に奴隷制度を根づかせ、独立に至るまで、英国の流刑地としての機能も果た
し、宗主国からの囚人と棄民を受け入れた合衆国と同じ歴史をもっている。しかし、独立後の合衆
国は、宗主国の残した奴隷制度を保持したまま、領土拡大に邁進し、フランス領を買い取り、旧ス
ペイン領を併合し、現ポルトガル領から安価な労働力を調達するに至った。つまり、ヴェルデ岬諸
島と同様の過去をもちながら、合衆国は、ポルトガルのように、文化的にも人種的にも類似した宗
主国から独立し、各国の旧植民地を併合しながら、太平洋岸に至るまでの領土を得た。原住民と強
制移住者を使い、遠方の植民地を経営するのではなく、地続きの領土を獲得し、原住民討伐を進め
ながら、自由意志でやってくる各国の貧民・棄民を、安価な労働力として受け入れる、全く新しい
形で土地と労働力を利用する移民国家が成立したのである。

第10段落で、約40年前から、ギーは合衆国の船に乗り組み始め、今や3隻に1隻の捕鯨船がギー
を雇い入れているという部分がある。もちろん、当時の合衆国の面積の3割強が奴隷州であった
事³⁰⁾をも踏まえてはいるだろう。しかし、19世紀初頭から続く大量の移民流入も示唆されているの
である。新米のギーだけを乗り組ませるなら、倍の人数を乗せるという第12段落の奴隷船を思わせ
る描写は、移民船にも起こっていたことである³¹⁾。“green”は、新参者の移民が、アメリカ風生き
方に戸惑っている状態をさすのに使われた軽蔑語であり、差別語でもあった。ハーバーズの読者も
実感していたであろうが、1855年のニュー・ヨークの総人口、62万3,000人のうち、52%は外国生
まれであったし、1820年から1860年までの40年間に合衆国に流入した500万人という移民の数は、
1790年の初の国勢調査で把握できた合衆国総人口を上まわっているのである³²⁾。

外国人が押し寄せて来ているという不安感から、合衆国北東部では、1840年代から、外国人排
斥を理念とする“nativism”が勢力を拡大し、中流層を支持基盤としたホイッグ党の解体に伴い、
その反奴隷制度派が、社会改善運動の波に乗って、アメリカをスラム化すべくヨーロッパから腐敗
と貧困と伝染病を持ち込む移民の市民権獲得の遅延・阻止を目ざして要職に返り咲いていた³³⁾。
第15段落には、“Discreet captains won’t have such a [ripe] ‘Gee. ‘Away with that ripe
‘Gee!’ they cry; ‘that smart ‘Gee; that knowing ‘Gee! Green ‘Gees for me!’”(p. 349)

と、雇用者層の外国人嫌いを端的に表わして、アメリカ生活に慣れて、対等にわたり合ってくる“ripe 'Gee”，つまり、時間とともに潜在的な競争相手となるヨーロッパ系移民を何とか排除しようとする中流層の偽善をついているのである。“Green 'Gee”のように低賃金で利用されるだけの外国人は、奴隷狩りのような手段にまで訴えて調達してくるが、“ripe 'Gee”となり、アメリカ人になり始めた外国人が市民権を手にして抬頭して来るのが恐ろしいのである。スラムを持ち込むからではなく、スラムから上昇してくるのが許せないのであって、スラムに滞留し続ける自由黒人と同等の地位に甘んじない事が脅威となっているのである。

第23段落に登場する“naturalized citizens badly sunburnt”と見える“sophisticated 'Gee” (p. 351) は、日焼けのひどい普通のアメリカ人に見えるのではなく、長年、屋外労働に耐えて、やっと市民権を手にした新移民に見えるだけなのである。外国生まれを理由に、一旦許した投票権の剝奪を画策したり³⁴⁾、候補者と認めない事を誓約させて入会を許す秘密結社が成立していた地域では³⁵⁾、“naturalized citizen”に見えても、公民権は無きに等しいものであったろう。また反対に、当時も、antislavery racists と呼ぶべき論客が、“a man but not a brother”という標語をかかげて、たとえ解放しても市民権を与えるには及ばない黒人奴隷の将来が議論の対象となっていた³⁶⁾。世紀の変わり目の頃に議会が奴隷貿易を禁じて以来、外国生まれの黒人の数は着実に減少し、1860年の時点では、合衆国内の黒人は、ほぼ全員がアメリカ生まれ、アメリカ育ちであり、その約1割強が自由黒人であった³⁷⁾。しかし、この“badly sunburnt”に見える生粋のアメリカ人も、たとえ奴隷でない場合ですら公民権は期待できなかったのである。

市民権・公民権を期待できない新移民や有色人種が参入していった労働者層は、どのように反応したのであろう。第20段落では、一般水夫のギーに対する敵意の理由が、“The 'Gees undersell them, working for biscuit where the sailors demand dollars” (p. 350) と説明されている。既存の労働者が、新参者を、職を奪い、賃金を引き下げる脅威と見なし、排除しようとしたのは当然である。しかし、この段落を、メルヴィルの話者は、“The innate disdain of regularly bred seamen toward 'Gees receives an added edge from this” (p. 350) と始めて、生得的な侮蔑、つまり、本能的なまでの差別意識に、利害が絡んで、悪感情に拍車がかかる状況こそが現実であり、純粋に経済的な問題ではないことを明らかにしている。

ギーは、有色人種であると同時に外国人であり、例え定住しても合衆国内では二重の差別を受ける存在である。外国人であるという属性は数世代のうちに完全な同化が進み、異分子としての脅威はなくなるが、有色人種であるという点では、自由黒人の当時の姿を観察すれば絶望的であった。外国人には同化を強要するが、有色人種には、同化を許さないアメリカ文化があったからである。ゆえに、第1段落において、“*The two Dutchmen, or The two Indians*” (p. 346) と言及される民族区分の根本的な意味は、オランダ人とドイツ人の差違は無視され、同化を強要されていくものであるが、アーリア人でも浅黒いインド人と、生粋のアメリカ生まれであろうとも、モンゴル系のアメリカ・インディアンにはともに同化の道は無いということでもあった。

第20段落で、大衆の差別意識の根深さに言及した話者は、“Hence, any thing(sic) said by

sailors to the prejudice of 'Gees should be received with caution" (p. 350) と続 けてい る。もちろん、文章の流れから言えば、ギーに対する敵意は賃金に関わる問題だと規定した後の事 である。しかし、話者は、ここで、船員風情が開陳する偏見は聞くに価しないと、これまでの差別 的言説全てを無効にし、更に、元船員である自らの語りそのものをも 無効にして、この作品全体 が、異国風物紹介を模倣した眉唾物であった振りをして見せている。その上、船員とは、ギーと同 じ“monkey jacket”を身につけて、帆柱を登り降りし、遠目には両者ともに、猿にしか見えない 者でありながら、この“猿上着”を、フエゴ島から始まったと称して、“'Gee jacket”と呼びたが る男達であり、中産階級に属する読者、つまり、船長や所有者と描かれている人間から見れば、つ くはずも無い区別を求めて小細工を弄する理不尽な輩としか映らないように描いて見せ、階級差別 的優越感に類する失笑すら誘いかねない筋立てとしている。

メルヴィルが終始して煙幕を張り続けて来たのは、この階級差別をつくためではなかったか。万 民の平等を標榜しながらも、あらゆる差別の現存する合衆国で、南部の奴隷制度を攻撃して道徳的 優越感に浸る北東部の中産階級、新移民をいたぶる労働者を軽蔑して 見せる雇い主層、このよ うな社会的にも 経済的にも支配する 側にある差別意識をもメルヴィルは批判している のである。 “prejudices”をもち“bigots” (p. 347) であるのは、水夫達だけではないのである。第17段落に おいて、ギーの瞳の中まで覗き込み、目の異物を取り除くと言われた“eye-stone”を使ってでも “what speck or beam of viciousness, if any, will be floated out” (p. 349) と調べねばなら ぬと警告するのは、“And why beholdest thou the mote that is in thy brother's eye, but considerest not the beam that is in thine own eyes?”³⁸⁾ という聖句を思い出させるため である。彼は、この作品において、安穩たる都市部の中産階級である自らの読者の中にあるはずの、 キリスト者らしい自省心に挑戦しているのである。

第23段落に言及される“Genin's hat” (p. 351) も、都市文化を揶揄するものである。Nicholas Genin は、広告の巧みな帽子商で、バーナムの博物館の隣りに店を構えており³⁹⁾、ゲニンはバー ナムを思い起こさせたであろう。そして、バーナムは、教会出席を欠かさず、禁酒運動の講演者を 勤めながら、例えば齢161歳のジョージ・ワシントンの乳母という触れ込みで、解放奴隷の老女を 展示するような類の博物館を経営しており、その効果は、“even the most apparently serious aspects of American culture could be reduced to the theatrical when placed beside the merely bizarre”⁴⁰⁾ と言う、悪名高い“Prince of Humbug”⁴⁰⁾ らしい見世物小屋の館長であ った。しかし、ニュー・ヨークの都市文化は、宣伝上手の帽子屋の突出した商業主義や、卑俗な好奇 心を煽る似非博物館を受け入れたのである。

“Genin's hat”に弁髪を隠した中国人は、アメリカらしいものに憧れ、同化しようとした初な外 国人かも知れない。そして、彼が、ブロードウェイを散策するために新しい衣類を身につけても、 東部では受け入れ難い“an eccentric Georgia planter”に見えたなら、彼に同化の望みはなく、 奇妙な“Chinaman”として、第22段落で同化の試みの例として紹介される、サランカ大学を卒 業した唯一のギーや、ダートマス大学で古典文学と高等数学を修めたインディアン等と共に、バー

ナムの博物館に陳列されたであろう。

メルヴィルが、差別語である“Chinaman”と言う語を意図的に用いて登場させた中国人も、当時のニュー・ヨークであれば、弁髪姿も珍しい異国風物で、好奇の目を楽しませる存在であったろうが、1820年代には2名であった中国からの移民は、1850年代には4万1,000人に達し、各地の鉱山開発や鉄道敷設に従事しており⁴¹⁾、必ず、ギーが象徴する“同化し得ない人々”となって、排斥運動の対象となる事は充分予見できたのである。例え、一部の社会改善家が、一握りのインディアンをホメロスの引用ができる紳士に仕立て上げてても社交界の愛玩物として、3音節の英単語も規範通りに使おうとしない、あるいは、使えない水夫達を貶しめる用に使われるのみである。

第3段落に、メルヴィルは奇妙な比喩を配している。“... with [sailors] the primitive word Portuguese itself is a reproach; so that 'Gee, being a subtle distillation from that word, stands, in point of relative intensity to it, as attar of roses to rose-water.” (p. 347) 水夫が崩して用いる“Portuguese”がバラ水で、その蒸留液であるバラ油が“'Gee”であるなら、本来の“Portuguese”は、バラの花そのものであろう。ギーは、バラでありながら、貶しめられ、終に、抽出された高価な香油に喩えられるのである。最も貶しめられたものが、最も高められるというのが西洋の宗教の教えの根幹ではなかったろうか。しかしギーは、そのキリスト教国の中であって少しも高められていないのである。また、バラの西洋文明における多義な象徴性を考慮するなら、その抽出物と比せられるギーは、その真髄を象徴するものであろう。まさに、ギーはその西洋文明を西半球で引き継いだ合衆国の文化そのものの真髄を露呈する媒体なのである。ギーを語る話者は、アメリカ合衆国の真髄を暴いているのである。Ethnography は著者を暴くものだからである。

メルヴィルは、この比喩一つに依っても、この作品が、価値観の転換を求める啓示的な文章であることを示唆している。標榜するところと現実の乖離が社会秩序となってしまうからである。具体的には、階層序列、金権主義、奴隷制度や領土拡張等の合衆国の現状の再検討を要求しているであろう。しかし、リアリストでもあるメルヴィルは、土地を奪い、安価な労働力を求め、インディアン、黒人、欧州からの新移民、大西洋の島民、中国人を順次導入しては、差別意識で分断された階層序列の最底辺に配置し、同化を強要したり、阻んだりしながら、国内に次々と植民地を形成するアメリカ合衆国を眺めてきているのである。旧植民地帝国の採用していた支配の形を取るのではなく、新しい土地と労働力を、対等併合・自由意志による移民という形で獲得し、また、形式的には独立していても、文化・社会・経済的な影響圏の中に組み入れ、実質的な支配下に置く、新しいアメリカ合衆国式の属国支配を見ているのである。カーチャーが、太平洋で途方に暮れているはずだと決めつけたキーン船長は、決して、戸惑いはしないのである。安価な労働力調達に専門家なるキーン船長は、大西洋で学んだ手法を駆使して、太平洋岸にまで領土拡大を遂げた合衆国のために、新たなギーを求めて、東インド支配を目ざして、太平洋における、影響圏拡大のために邁進しているのである。

NOTES

- 1) Herman Melville, "The 'Gees'" in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*, eds. Harrison Hayford, et al. (Evanston: Northwestern U. P. & The Newberry Library, 1987), pp. 346-351. 以後、本作品からの引用は、この版から括弧内にページ数を入れて示す。
- 2) Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader's Guide to the Short Stories of Herman Melville* (Boston: G. K Hall, 1986), pp. 215-216.
- 3) *Ibid.*, pp. 155-156.
- 4) *Ibid.*, pp. 215-216.
- 5) Nina Baym, *Novels, Readers, and Reviewers: Responses to Fiction in Antebellum America* (Ithaca: Cornell U. P., 1984), pp. 249, 253 & 258.
- 6) Baym, pp. 14-15.
- 7) Newman, p. 219.
- 8) *Ibid.*, p. 218.
- 9) R. Bruce Bickley, Jr., *The Method of Melville's Short Fiction* (Durham, Duke U. P., 1975), p. 56.
- 10) *Ibid.*, pp. 57-58.
- 11) *Ibid.*, p. 58.
- 12) William B. Dillingham, *Melville's Short Fiction 1853-1856* (Athens: Georgia U. P., 1977), p. 359.
- 13) *Ibid.*, p. 359n.
- 14) Carolyn L. Karcher, *Shadow over the Promised Land: Slavery, Race, and Violence in Melville's America* (Baton Rouge: Louisiana State U. P., 1980), pp. 160-185.
- 15) *Ibid.*, p. 24.
- 16) David S. Reynolds, *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville* (New York: Alfred A. Knopf, 1988), p. 471.
- 17) *Ibid.*, p. 470.
- 18) Herman Melville, "The Authentic Anecdotes of 'Old Zack'" in *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*, pp. 212-229.
- 19) Karcher, pp. 166-168.
- 20) *Ibid.*, p. 185.
- 21) *Ibid.*, p. 185.
- 22) *Ibid.*, p. 185.
- 23) Samuel Eliot Morison, *The Maritime History of Massachusetts 1783-1860* (Boston: Northeastern U. P., 1921), pp. 106-109.
- 24) Karcher, p. 161n.
- 25) Morison, pp. 322-323.
- 26) Karcher, p. 161.
- 27) P. G. マーシャル, G. ウィリアムズ, 『野蛮の博物誌——18世紀イギリスがみた世界』1982, 大久保桂子訳, (東京・平凡社, 1989), p. 338.
- 28) スティーヴン J. グールド, 『人間の測りまちがい——差別の科学史』1981, 鈴木善次, 森脇靖子共訳, (東京・河出書房新社, 1989), p. 49.
- 29) George Fitzhugh, *A Sociology for the South; or The Failure of Free Society* (Richmond: A Morris, 1854). Cited in *Slavery* by Stanley M. Elkins (Chicago: Chicago U. P., 1959), p. 215n.
- 30) *A People & A Nation: A History of the United States*, vol. I, eds. Mary Beth Norton, et al. (Boston: Houghton Mifflin, 1982), p. 353.
- 31) *Ibid.*, p. 288.

- 32) *Ibid.*, pp. 287-288.
- 33) David H. Bennett, *The Party of Fear: From Nativist Movements to the New Right in American History* (Chapel Hill: North Carolina U. P., 1988), pp. 105-115.
Alexander Saxton, *The Rise and Fall of the White Republic: Class Politics and Mass Culture in Nineteenth-Century America* (London: Verso, 1990), pp. 71-72.
- 34) Bennett, p. 54.
- 35) *Ibid.*, p. 111.
- 36) George M. Fredrickson, *The Arrogance of Race: Historical Perspectives on Slavery, Racism, and Social Inequality* (Middletown: Wesleyan U. P., 1988), p. 54.
- 37) *A People & A Nation*, pp. 267 & 294.
- 38) 『新訳聖書』, マタイによる福音書第7章3節, 及びルカによる福音書第6章41節。
- 39) Harrison Hayford, "Notes" to *Herman Melville* (New York: The Library of America, 1984), p. 1472.
- 40) Reynolds, p. 469.

付記 本稿は1987—89年度阪南大学産業経済研究所共同研究「世界経済の展開にともなう西欧社会と土着社会の接触と文化変容の比較研究」による研究成果の一部である。

(1991年10月8日受理)